井上清三 × 平井雷太

小学校教諭

井上清三さんは川崎市立小倉小学校の先生です。
9年前に、井上先生が川崎市立住吉小学校にいたときに、らくだ教材を入れているのですが、
これが日本の学校現場でらくだ教材が使われるようになった最初です。
ここで2年使ってから、小倉小学校に移り、ここで7年間らくだ教材を使っています。
どんなきっかけでらくだ教材を使うようになり、どのように続けてこられたのか、
そのあたりを中心に話を聞いてみました。

10問中1問できたら「できた」ですすめるやり方を やらずにすむようになりました

「らくだ」は新鮮だった！

平井： もう「らくだ」を始めて何年になりますか？

井上： 正確には、9年目ですね。

平井： 「らくだ」をやって、見えてきたことはありますか？

井上： 算数で水道方式を以前やっていて、子どもは理解すれば必ずできるようになると思っていたのですが、10年ぐらいやっても、それでは成績があがらない。だけど、プリントを何枚もやっていくと、必ずできるようになるんだな、と感じましたね。

平井： それは、「らくだ」を入れて、すぐわかった？

井上： 入れて1年目ぐらいで、「ああ、こういうものなんだな」と思いました。やっぱり、「子どもが何回も計算をやる」ということが大事なんだな、と。例えば、「1+1が2になる」ということが「わかる」ということ、それに慣れてしまっていました。それが、平井さんがよく言われるように、あとで、「1+1は何で2になるのか」ということがわかる段階で「ああ、そうなんだ」となる学習がいいのかな、と思いました。

平井： 井上さんは、結構、「意味がわかる」ということをやっていたんですよね？

井上： そうです。それで、いろんなプリ

ントを出して、子どもがそれに対して何か言って、公式を導き出したり…、というのをメインでやっていたのですが。

平井: 「意味がわかる」、「子どもが気づく」みたいな。

井上: そうです。そういうものが算数の授業じゃないか、と思っていたのです。それが、「らくだ」はただ問題をやってもらうとか、こちらが何も言わないで「これをやろう」と、それも全然教えもしないで、というのが、びっくりしました。教えないで、裏の答えを見て自分なりに考えるとか。なまじ私が言うと、混乱してやりたくなくなってしまう。その辺りが、ものすごく新鮮でした。

平井: 新鮮だった?

井上: かなり。

平井: 結構、余計なことやっていた、みたいな感じですか?

井上: それはそうです。かえって余計な、洗脳する感じになっていたかな、と、今では思います。

子どもを前に、悩む箇所が違ってきました。

平井: 子どもを見直した、みたいなところがありますか?

井上: 見直した、というのもそうかもしれませんが、自分自身がちょっと変だったな(笑)、と思います。「子どもができないのは自分のせいだ」と前は思っていたし、教える確固とした理論というのが、自分はまだつかめていないんじゃないか、と、ずっと思っていました。それが、「らくだ」を与えることで、子どもが勝手にできるようになっていったので…。ただ、そのできるようになっていく過程で、「もうやらない」という子どもの拒否、勉強の中身とは違う問題に対処する時にどうしたらいいか、というそちらの方が、なかなか難しい…。反面、そういうところで悩む自分は前と違うなと思います。

平井: 悩む箇所が変わってきた?

井上: そうです。前は、自分の教え方をもっとどうにかしようと、例えば「水道方式」の講習会とかに行って吸収すべきだなと思っていたのですが、違う(笑)。もっと、「本当に子どもはそう思っているのか」とか、「嘘を言っているんじゃないか」とか、「本当は何をしたいのかな」とか、そちらの方を見るようになった感じがしますね。

平井: 「何をしたいのかな」って?

井上: 「やめたい」って言っているけど、本当にそうかと。

平井: 子どもの言葉を真に受けない、ということ?

井上: そうですね。真に受けないでどうするかというところで悩みましたけれど、以前は、問題にもしませんでしたから。だから、やりたくない奴には、「やれ!」という感じでした。

平井: やりたくないなんてことは、許さなかった!

井上: 許さないです(笑)。気迫もありましたし、ひっぱたきました。それで、ひっぱたきながらやらせてもできない子がわかるようにするには、それなりの教授法があるんじゃないかと思っていたんです。それを突き詰めてやっていくと、何度も計算をやらせてもおかしいんじゃないかと、あまり計算をやらせなくなっていた。理解すればそれでいい。10問中1問できればいい。そういうふうになっていたんですけれども。ところが、「らくだ」は違うから(笑)。…そういうところがすごく新鮮だった。それで、平井さんや(横浜の指導者の)中城さんの子どもの対し方を見ていると、「なんでこんなに先生がラクになれるのかな」(笑)。楽しくやれるのかな、と…。

平井: でも、それって「教育の根本」みたいな問題ですよね?

井上: そうですね。今思うと、そうですね…。

平井: 何か子どもにかかわろうと思った時、子どもはやらないですよね。そして、やるかやらないかは問題じゃないと。それでいて、子どもができなかったら、教え方が悪いんだから授業研究しなくちゃいけないと思って、そっちのほうを一生懸命やっていたんだよね。どうやったらやる気になってやるかなんてことは関係なくて、わかるかわからないかを問題にすると、どうすればわかるようになるかが先生のテーマになってしまうんだよね。

井上: まさにそうです。それしかないと思う。

平井: そういうのをやっていて、よく「らくだ」をやる気になったね(笑)?

井上: だから(笑)、それは、やっぱり先生を辞めようと思って…。自分で苦しくなっていたんです。それに、もう、全然面白くもないし。

平井: やっぱり真面目だったんだよね?

井上: そうです。今でも真面目なんですが…(笑)。

平井: 真面目だから悩むんだよね。

井上: そうですね。奥さんにも言われますよ。

平井: それで、自分が一生懸命やるだけじゃ、子どもはやるようにならない。方法がない。万事休す?

井上: 「やるようにならない」と思ったわけじゃなくて、自分でクビが絞まって、もう苦しかったんです。動けなかった。それで、その発散場所として、「君が代」とか「日の丸」のほうとか…。(笑)

平井: 自分がやっていて、子どもが思い通りにならなくて苦しくなったのを、学

校の生徒の在り方とか国のやりようとか、そっちのほうに関心がいっちゃったんだ?

井上: そうですね。そんなに学校が強制的にやっていたらダメだ、子どもは自立すべきだとか言いながら、教室でそういうふうにやって、自分でクビを絞めていたんです(笑)。

平井: 結局は、自由にさせながら、肝心なところで管理していたんだよね。

「え～!こんな小学校5年生のプリントが何でできないんだろう!」

平井: それで、「らくだ」に出会った一番最初のきっかけは何だっけ?

井上: 平井さんの考現学の会に入っていて、(福島県)三春町の岩江中でやっているということで関心を持って、平井さんに「岩江中でやっているんだけど、学校ではできない?」と聞かれたんですが、最初は難しいだろうな、と思っていました。でも一応、「らくだのプリントはやってみよう」と…。

平井: 「やってみよう」と思ったのは、どうして?

井上: 考現学の課題か何かで、「(算数のプリント)小5−25をやってみよう」というのがあって、見事にできませんでした。それが、すごく嬉しかったというか…(笑)。「え～! オレ、工学部で算数が得意だったのに、こんな小学校5年生のプリントが何でできないんだろう!」と、あれはびっくりしました。

平井: すごいね! このプリントはね。(笑)

井上: いや、約分で、13とか23が入るのは、これは間違いじゃないか、と思いました。あれは、全然できなかった。結果は目安15分のところ21分かかって、ミスが3個でした。

平井: 21分で最後までいったんでしょ? それは、すごくできるんだよ。

井上: だから、「小5−25」をやったのが、きっかけですね。嬉しかったというか。

平井: 何で嬉しいの?

井上: ワクワクしたっていうか。

平井: できないことがあると嬉しいの? 自信があったんだ、いろんなことに?

井上: そうでもないですね。いろんなことに劣等感を持っていましたから。でも、目標があると、嬉しくなる。絶対合格してやるという感じでハマりました。

平井: それで、学校で始めたのは、自分の「らくだ」の学習を始めてすぐ?

井上: そうですね。それに、子どもがやるプリントを先生が自分でやるというのは、ないじゃないですか? 今、考えると、そこが転換点だったんじゃないかと思います。

学校に「らくだ」が入る時

平井: 学校に入れる時、最初に校長に許可を取るのはやめたんだよね、私の助言で(笑)。

井上: はい(笑)、勝手に。それで、報告だけはしました。そうしないと広がらないので。

平井: 最初は何年生に使ったんですか?

井上: 2年生だったかな…。

平井: どういうふうにやったんですか?

井上: 2年生なので、教えることが少ないし、算数の時間を半分使っちゃおうと、毎日やりました。

平井: どうでした?

井上: そうですね。子どもは、自分のできるところをやるから、結構食いついてくるんですよ。

平井: 今までやっていた授業の感触と違う?

井上: 違います。自分もすごくラクだし。…ラクというのは、自分なりに考えなくちゃいけないこととか、…理解するためにどうしたらいいか、というのを考えなかったから。プリントさえ使えば、ラクです。それで、やらなくなった時、「わからない」と言った時どうすればいいかとか、そういう「新しい指導法」みたいなものが出てきたので、それを考えるようになりました。

平井: 井上さん自身、「らくだ」が入ったことで、子どもへの関わり方とか宿題の出し方とか、今まで当たり前だと思っていたことが、そうじゃなかったということがありますか?

井上: そうですね。自習のやり方とか、変わりましたね。すべて分単位で私が「これをやって、次にこれをやって」と決めつけていたのが、ほとんどなくなりました。一応前の日に子どもたちが自分で計画はたてますけれど。他の先生から言わせると、「井上先生のクラスは、自習がスゴイ」。

平井: そうなんですか?

井上: 何だか、子どもは自分で厳しく考えてるみたいで、自分で自分のクビを絞めてます(笑)。

平井: 子ども自身がね(笑)。

「わからないところにぶつかった時にどうするか」…学習者みんなが困るシステム

平井: 今まで、「らくだ」をやっていて、やめちゃおうと思ったことはないの?

井上: それはないですね。やっぱりこのシステムはすごいと思うんです。平井さんは怖いけど(笑)。

平井: オレ怖い?(笑)嘘だよ。どの辺が「すごい」と思うの?

井上: やっぱり、システムというか、平井さんが言われたように、「わからないところにぶつかった時にどうするかが勝負だ」、これが、本当だと思うんです。

もうわかっているところだけやって鼻高くなっている奴もいるし、自分と全然違うレベルのところでもヒーヒー言っている奴がいるというのが教室ですから。それでも「らくだ」だったら、みんな自分の合うところをやればいい。

平井: みんなができないところをやるんだよね。

井上: そうですね、みんな、困っているんです。みんな困って、もうヒーコラ言って、みんな「やりたくない、やりたくない」ってわめいて、そういう子でも頭の中で10%くらい「やらなくちゃ、できるようになりたい」という気持ちがあるので、そこを何とかしようと、そこにこっちは勝負をかけている。…面白いですね。

平井: みんな困っているって、いいでしょ?

井上: いいです! ホントいいです。

平井: 普通、先生は、そういうのを「いい」って言わないじゃないですか? 困らないようにするのが学校、という側面もあるでしょ?

井上: だからね、できる奴がいい気になるって、ちょっと違うんじゃないかな…。

平井: 今の教育のシステムだと、ちょっとできていい気になっている奴をいい気にさせない方法ってないよね。やさしいことやって、できて、得意満面なんだよね。それを「自信」とか言う訳ですよね。

井上: そういう子に、実際は授業を引きずられるわけです。でも、「らくだ」をやるとみんな一緒に困るから、いいなぁ、と。

平井: みんなが困っていて、なおかつ、困っている点を自分で解決できるわけだから。

井上: そうですね。だから、これを学校に入れてみたらいいと思うんです。

学校導入の実践

平井: 今、学校の中で導入するんだったら、こういうカタチがいいんじゃないか、というのはありますか?

井上: 「クラブ」の時間がいいんじゃないかと言う先生もいたのですが、今回は希望人数が少なくてできませんでした。自分が3年間続けているのでは、朝の始業前の時間、小倉小で言えば朝の15分間のチャレンジタイムで入れるのがいいのではないかと思っています。ただ、私の場合には、「家でやる」というのを基本にしているので、このチャレンジタイムの時間にやるのは、「相談日」になった子だけです。それ以外の子は、自習をしています。

平井: じゃあ、全員がやるわけじゃないんだね?

井上: はい。だいたい1週間に1回は必ず相談日になっていますが、2週間に1回の相談日の子もいます。

平井: 「らくだ」のプリントは、学校ではやらないんだ?

井上: 基本的には家で、です。学校でやると、家でやらなくなりますから。特別に、チャレンジタイムでプリントをやれる子というのは、記録表を持って来ない子とか、どうしても家でできない子で、そういう子に関しては、「1ヶ月間だけ学校でやるようにしようか」と提案したりしています。

平井: クラス外の子は何人ぐらいみているんですか?

井上: 今は、人数を把握していないのですが、だいたい、20人から30人ぐらいいます。

平井: そんなにいるんだ。

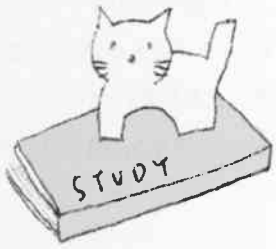
井上: それは、お母さんが口コミで、「井上先生がこんなことやっている」というので、来る子が多いですね。

平井: お話を聞いていると、要するに井上さんは「らくだ」を取り入れて、ラクになったんですね?

井上: はい、以前、平井さんが「この教材は、先生をラクにする教材だよ」と言われたことがあるのですが、「あ、ホントだな」と思うんです。それくらい、すごく学力に差があっても、いつでも、このプリントを見せれば、やれる。特に算数。だから、一番いいのは、中学、小学校高学年ぐらいで、何かの機会でこれをやることができればいいな、と思いますね。

平井: 他に、変わったところはありますか?

井上: 自分は子どもとよく話すようになりました。前も話していたのかもしれませんが、前は「オレについて来い」という感じで「これやろう、これやろう」という感じの会話だったと思うんですね。それが、最近、話すようになりました。まあ、変わらないところは、変わらないですけれどね(笑)。



井上清三 × 平井雷太

井上清三(いのうえせいぞう)
川崎市立小倉小学校6年担任。